

27年度版教科書つれづれ 番外編1 「ミリーのすてきなぼうし」(光村図書・小学2年)の巻

加藤 郁夫 (読み研事務局長)

このコラムは、23年度版から27年度版にかけて教材や手引きの変更点を取り上げてきた。当初は、それだけに限って書くつもりだったのだが、書いている内に新教材にも触れたいようになってきた。それで番外編として、27年度版で新しく取り上げられた教材について述べようと思う。

「ミリーのすてきなぼうし」(きたむらさとし)は、光村図書の小学2年(上)の物語である。これは書下ろしではなく、もとの作品がある。きたむらさとし作の『ミリーのすてきなぼうし』という絵本で、2009年にBL出版から出されている。

教科書に採録されるにあたって、文章が一部変更されているが、何よりも大きな問題は、もとの作品が、絵と文章が一体になった絵本であるという点である。『スイミー』も絵本であるが、『スイミー』の方が、絵と文章の一体性は弱い。言い換えれば、文章の自立性が高いのである。それに対して、『ミリーのすてきなぼうし』は絵と文章が切り離し難く結びついているところがある。

だから、教科書で「ミリーのすてきなぼうし」を読むと、少しとまどってしまう。

具体的に見ていこう。教科書は、次のように始まっている。

ミリーは、さんぼのとちゅう、ぼうしやさんの前を通りました。

原作である絵本(以下、絵本と呼ぶ)は次のように始まっている。

ミリーは がっこうのかえり、ぼうしやさんの まえを とおりました。

学校の帰りでは、寄り道になってしまう。ほとんどの学校では寄り道はいけないことと指導している関係から、「さんぼのとちゅう」とされたのであろう。この点は理解できるのだが、学校の帰りであれば、学校に行っている子どもだとおおよそ推察できるが、「さんぼのとちゅう」では、この箇所からミリーの年齢を読むことはできない。

絵本は、表紙や中表紙に、帽子をかぶった(それもかなり奇妙な帽子を)ミリーの絵を載せている。そこからひと目で幼い女の子だとわかる。表紙を見、ページをめくってお話にたどり着くまでに、絵がミリーの紹介をしているのである。

ところが、教科書ではタイトルがあり、文章がいきなりはじまる。見開き2ページの左上にミリーが帽子屋さんにいる絵があるのだが、少なくとも教科書を読む場合、絵を見て人物像を想像するのではなく、文章からそれを読みとるのが普通であろう。

もちろん冒頭の一文で人物像が示されなければならないわけではない。その後で示されてもよいのだが、この作品では、ミリーの年齢について述べた文章はこの後も皆無である。したがって、教科書ではじめてこの作品に出会った読者は、ミリーはどんな子なのか、子どもなのか大人なのか、名前から女の子らしいとはわかるものの、ミリーの人物像がはっきりしないままに読み進めることになる。もちろん、さきほど触れた挿し絵を見ると、小さな女の子が描かれているから、どうも小さな女の子らしいとあたりをつけながら読んでいくことになる。

この話は、ミリーが帽子屋さんの店長から、想像の帽子をもらい、ミリーの想像で、帽子がさまざまに変わっていくというお話である。

絵本では、ミリーが帽子屋さんのお店に入って、店長とやりとりする場面(帽子屋さんに入って、

店長に「はねのついた ぼうしを みせてください」と頼むところから、想像の帽子の代金を払って出て行くところまで)に6つの絵が置かれている。ミリーは幼い女の子であるから、高い帽子が買えるわけもなく、財布の中は空っぽである。そんなミリーに店長さんは、きちんと一人前のお客さんとして応対してくれる。ミリーがお金を持っていないと分かって、店から追い出すのではなく、ミリーにあった帽子を一生懸命に考えてくれる。そして、想像の帽子(要するに帽子があるふりをしてミリーに渡すのである)を考えだして、ミリーにかぶせてくれる。想像の帽子だから、ただなのだが、ミリーは「おさいふの なかみを ぜんぶ てに とり」店長さんに渡す(これも渡したふりをするのだが)。

そんなやりとりが、絵本では絵と文章が一体になることで、すんなり理解できる。ところが教科書では、店長が想像の帽子をミリーの頭にかぶせている絵しか載っていない。そしてこの絵は、ミリーの頭の上に帽子は載っていないのだが、うっすらと何かあるようにも見えてしまう。つまり、教科書では、ミリーが買った帽子(実際はもらったといってもよいのだが)が、空想のものか、そうでないのかがちょっとはっきりしないまま、次へと進まなくてはならないのである。

教科書では、次のページでミリーが「クジャクのぼうし」と想像することで、ミリーがかぶっているのが想像の帽子であることが、はっきりする。

この後もミリーは、ケーキ屋さんの前を通れば「ケーキのぼうし」、花屋さんの前では「花でいっぱいぼうし」、公園では「ふんすいのぼうし」といろいろに想像していく。絵本では、それぞれの様子が描かれていて、ミリーの帽子がミリーの想像の中で、いろいろに変わっていくさまがよく分かる。この辺りは、まさに絵本の真骨頂といえる。文章と絵が一体になったものを、読者は楽しみながら読み進めるのである。そしてミリーは、突然気づく。ぼうしを持っているのは自分だけじゃなく、みんな持っていることに。

この後に、おばあさんとすれ違う場面があるのだが、ここも絵本と教科書では少し違っている。その場面の文章を教科書から引用する。

むこうから、おばあさんがやってきました。おばあさんのぼうしは、くらくてさびしい水たまりでした。ミリーがおばあさんにほほえみかけると、ミリーのぼうしの中から 鳥や魚がとび出して、おばあさんのぼうしにとびうつりました。

ミリーはうれしくなって、うたをうたいました。すると、ぼうしもいっしょにうたいました。

絵本も、教科書もこの場面のはじめに、鳥や魚がいる帽子をかぶったミリーと、水たまりの帽子をかぶったしかめっ面をしたおばあさんがすれ違う絵を載せている。教科書の絵は、それだけでこの場面は終わる。

ところが、絵本の方は、見開き2ページの左のページに先に述べた二人がすれ違う絵があり、右のページ(絵本は「左開き(左側へ本の扉が開く形)」である)におばあさんの頭の上の水たまりの帽子に鳥や魚がいっぱいいて、にこにこしたおばあさんが楽しそうに駆けていく絵がある。つまり「鳥や魚がとび出して、おばあさんのぼうしにとびうつりました。」のあとの様子が絵で描かれているのである。

しかめっ面のおばあさんが、楽しそうになったから、ミリーは「うれしくなっ」たのである。しかし、教科書ではおばあさんがどうなったのかは文章でも絵でも描かれていない。したがって、ミリーが「うれしくなっ」た理由は、もう一つはっきりしない。

実は、この部分の「ミリーはうれしくなって」という表現は、絵本にはない。絵本は「とりや さ

かなが とびだして、おばあさんの ぼうしに とびうつりました。」で、ミリーがそれを喜んだとも、うれしくなったとも、書かれていない。先程も述べたように、おばあさんの頭の上の水たまりの帽子に鳥や魚がいっぱいいて、にこにこしたおばあさんが楽しそうに駆けていく絵があり、それですべてを説明している。同じページでミリーは、すでにおばあさんとすれ違って、一人で歩いている。すれ違う前と後の違いは、ミリーのぼうしの大きさである。前は、魚が二匹、鳥が一匹だったのが、後のぼうしは十匹以上の鳥がいるのである。そしてそのページには「ミリーが うたをうたうと……」とだけ書かれている。

さらに絵本のページをめくると、2ページの見開きいっぱいに、歌を歌っているミリーの頭の上の帽子が鳥や獣や家や花で大きく膨らんでいる様が描かれている。そしてこの絵は、教科書にはもちろんない。

ミリーが歌をうたうことで、帽子は大きくなっていったのである。

だから、ミリーが家に戻った時こう書かれるのである。

そうしてミリーは、いえにもどりました。でも、ぼうしが大きくなりすぎて、中に入れません。ミリーは、ちがったぼうしを、そうぞうしてみました。

大きくなった帽子が描かれているからこそ、この文の意味はすんなり理解できる。しかし教科書では、しかめっ面のおばあさんとすれ違う絵の後には、すでに家の中に入っているミリーの絵が出てくる。なぜ「ぼうしが大きくなりすぎ」たのかの説明もないままに、この文章を読まされても、「？」としかならない。

このように見てくると、しかめっ面のおばあさんとすれ違うところから、ミリーが家に戻るまでの場面の絵本と教科書の違いは、大きなものであることがわかってくる。ミリーの頭の上にある帽子は、ミリーの想像で生まれた帽子である。だからミリーの想像の中でだけ、さまざまに変化する。

「クジャクのぼうし」「ケーキのぼうし」「花でいっぱいのぼうし」「ふんすいのぼうし」、みなミリーの想像の中の帽子である。ミリーがそう思っているだけといってもよい。しかし、おばあさんとすれ違った時、ミリーの帽子から「鳥や魚がとび出して、おばあさんのぼうしにとびうつ」ったのである。その結果、おばあさんの頭の上の水たまりの帽子は鳥や魚でいっぱいになり、顔つきはにこやかになり、楽しそうにおばあさんは駆けていく。ミリーが想像した帽子が、周りの人に影響を与えるのである。つまり、この話はミリーが頭の中でいろいろな帽子を想像したというだけに留まっていない。ミリーの楽しい想像が、周りの人をも楽しくさせるのだ。ミリーの楽しい気持ちが、おばあさんの暗い気持ちを明るくするのである。そして、そのことでミリーはさらに楽しくなり、歌をうたい、帽子がぐんと大きくなるのである。ミリーが歌をうたい、帽子が大きくなっていく場面こそ、この絵本のクライマックスといってよいかもしれない。

しかしすでに指摘したように、おばあさんの変化も、ミリーの帽子が大きくなる場所も、教科書には出てこない。「ミリーはうれしくなって」とはあるものの、なぜうれしくなったのかもはっきりしないし、帽子が大きくなったことも説明されない。

絵と文章が一体のものを、切り離れたからダメだと言うのではない。教科書に収録するためには、それなりの変更が必要なことは理解できる。しかし、この作品のまさにクライマックスといえる箇所をごっそりカットしての収録は、あまりにひどい。この絵本が、絵と文章が緊密につながり合っていることへの理解があまりにも弱い。文章だけでお話が理解できると、思い込んでいるのではないか。絵本と全く同じにせよというつもりはないが、少なくともあと2~3カットの絵を入れるか、

文章で補いをつけることができたなら、話の内容はぐんとわかりやすく、魅力的なものになっていた。

そしてもう一つ、この作品は絵と一緒に読みましょと、どこかに入れておいて欲しかった。ふつうの挿し絵とは意味が違うことを、押さえて読む方がこの作品の理解はより深まると思う。

絵本と教科書掲載作品とを比べて、教科書の不備を指摘してきたのだが、最後に授業に関わって述べておこう。ここまで述べてきたことからわかるように、この作品は、できれば子どもたちに絵本を示して、不足を補いながら読んでいく方がよいだろう。ミリーの年齢にしても、絵本の表紙を見せて、そこから読み取らせたらよい。おばあさんとの場面も、絵本でどうなったかを子どもたちに読み取らせて考えさせるとよいだろう。そして、絵と文章が一体になった作品であることにも気づかせていけたらよいだろう。

ただ、どこの学校でも絵本が簡単に手に入るわけではないかもしれない。その場合には、教師が不足部分を補ってやりながら、読み進めるしかないだろう。

最後に、手引きに触れておく。この作品は、「お話クイズをしよう」の中に位置づけられており、次のような手引きが書かれている。

「ミリーのすてきなぼうし」の中で、すきなところをえらんで、お話クイズをつくりましょ。そして、クイズを出し合って、たのしみましょ。

クイズが全てダメだとは言わないが、この作品でクイズ作りが、メインの課題になると、どうしても出来事にばかり目が行くことになる。事実、手引きの終わりにある「お話を、みんなでたのしむ」という枠囲みの中には、「じんぶつがなにをしたのか、どんなできごとがあったのかに 気をつけて読む。」と書いてもある。

出来事を中心に見ていくことは、ストーリーを見ていくことである。しかし、すでに見てきたようにこの作品は、絵と文章が一体となるようにつくられたものであった。それもミリーの頭の中での想像の出来事が中心である。なおかつ、教科書に掲載された作品は、作品としての不備も併せ持っていた。どう考えてもよい手引きとは思えない。

少なくとも、クイズを作るために作品を読むのではない。お話を楽しみ、お話の仕掛けや工夫が分かることでクイズ作りも意味を持つてくる。教科書の作り手が、お話の楽しさや仕掛けがわかっていなくては、よいクイズができるだろうか。